

支給対象者修了報告書(短期派遣学生用)

標記について、下記のとおり報告します。

記

○基本情報

短期派遣学生氏名	西山雄大	在籍大学等名	京都大学
派遣先大学等名	西安交通大学		派遣先の大学等での 在籍課程・身分
奨学金支給期間	平成 26 年 9 月 ~ 平成 26 年 9 月	派遣先国・地域名	中国

○報告内容

学習成果について(自由記述)

派遣に参加しようと思ったそもそもの初めは、「この国から出なければならない」と強く意識したことであった。私は元来、慣れない環境に対して極度な抵抗を覚える。この気質が日本のそれと比べて狭い地域に私を押しとどめていた。しかし大学における様々な挫折につけて、自主的な決断力を獲得するために私はこの環境から一度足を踏み出さねばならないという内なる要請が生まれた。あるいはそうした挫折から、ひいては日本という地から逃れたいという動機があったというのが本当のところかもしれない。

旧来私には言葉に対する強い関心があった。第二外国語として選択した中国語の他にも、私はいくつかの言語を学んだ経験がある。語学へと私を駆り立てる動機とは、ひとえに自己を表現することへの強い欲求であった。つまり私は、もっぱら自分自身のために言葉を学んでいた。

しかしながら現地において、投げかけられた言葉や目の前で交わされる言葉を解することができない、あるいはその意味を辛うじて解しても言葉にできないという体験は、とても苦しいものであった。滞在期間中、私の言語運用力はそれほど上達しなかった。代わりに私の中に生まれたのは、彼らの話す言葉を解きたいという、他者に向けられた強い欲求である。

中国との文化的な差異はほとんど感じられなかった。むしろ痛感したのは、同行した日本人学生とのももの見方のずれである。彼らは集団で物事を決定することを好み、連帯して行動した。一方私は集団で行動することが苦手で、何も主張せずに同調することをやめればたちまち皆から切り離されてしまう。また彼らは物質より体験そのものを重視した。私は知人や友人に贈ったり、自らの手元に残すためのお土産を買い求めることに執着した、なぜなら物的なよすがのない思い出など儚いものだと思うからである。他方で彼らはお土産として、食べるようになってしまってお菓子を好み、形あるものを残すことにそれほど頓着しないように見えた。これは私にとって信じがたい性向であった。こうして私を日本の外へと向かわせた違和感の自覚は、今回の派遣でますます強化された。私は彼らのような日本人ではなかった。しかしながら中国で「哪里人?」と訊かれると、私は「日本人」と答えてしまうのだった。今回の派遣も日本の京都大学からの留学生という名義で来ている。私自身も彼らの判断を心のどこかで当てにしていた。私はやはり日本人でしかなかった。

今回の派遣は二週間にして非常に充実したものだったが、これをもって国外への志向が飽くものではない。私は東アジアの他の地域、具体的には韓国や台湾などにも赴いてみたいと思っている。これを先駆けとして、海外での経験を積み、現地の学生との交流を深めたい。それが研究に直結すればなお良いと思う。

滞在期間中、受入大学の学生や先生から当地や各地の中華料理が振る舞われ、その数々の絶品を私は心から楽しんだ。しかしそれらの料理を生んだ風土文明に根付くその豊かな言葉を、私は見ず見ず味わうことができなかった。山椒の辛さによる舌の痺れは、現地で話すべき舌が麻痺してしまった辛さと繋がっている。

食事やその他さまざまな共通体験を通して、現地の学生とはとても楽しくかつ有意義な交流ができた。現地での経験は彼らを通して得られたところが大きい。とはいえ一人で現地の人々とやり取りする機会もないではなく、その際にはやや骨が折れた。簡単な買い物や食堂での注文ですら、伝えるだけならまだしも相手から思わず言葉をかけられると、途端に私は当惑して言葉に詰まってしまうのだった。簡単な受け答えでさえ、できるようになるまでには時間と苦勞を要した。不愉快な出来事もないではなかったが、概して日本では得がたい経験であった。

派遣プログラムの内容について(自由記述)

プログラムは本当に充実したものだった。現地に到着すると、西安交通大学の学生と先生方が手厚く受け入れてくださった。平日の午前中には、文法事項や新語などについての中国語の授業と、西安に都の置かれた秦代から唐代にかけての中国や日中交流の歴史の授業が二人の先生によって行われ、午後には兵馬俑や大雁塔、かつての長安の都の城壁、空海ゆかりの青龍寺、各分野の博物館などを訪れたり、歴史や唐詩や書道についての講義に加え、太極拳のレッスンを受けたりした。食事の時間や週末の自由時間には学生が街に連れ出してくれ、西安当地の料理のほか四川料理や上海料理など、多種多様な美食の席を共にしてくれた。このような至れり尽くせりのプログラムが提供されているとは、実際に参加してみるまで知りえなかったし、今後社会人になっても不可能な体験だと思う。西安交通大学には本当にお世話になった。

進路への影響について(自由記述)

私は現在工学部に所属しているが、これから人文社会系の学部に入塾して、社会学か美学を専攻したいと考えている。とりわけ文字や規範に興味があり、両者において劇的な改革を経験した中国という土地には、かつてより関心を寄せてい

派遣先大学等名	西安交通大学		派遣先の大学等での 在籍課程・身分
奨学金支給期間	平成 26 年 9 月 ~ 平成 26 年 9 月	派遣先国・地域名	中国

○報告内容

た。ある社会学者は、社会科学の立場から中国を論じようとしても、従来の西洋仕様の枠組みでは通用しないと述べている。人々の視線は今も欧米に向いているが、日本文化の父は何と言っても中国である。中国の重要性を再評価し、そこから日本という国を捉え直すことのできる視点は、今日間違いなく必要とされるものである。今回の派遣だけではとても十分とは言えないが、少なくともそれへの手懸かりを得られたということ、これからの進路決定では強調していきたい。

唐詩の授業で私が日中の詩歌に関心を持っていることを表すと、担当の先生は大変好意的に接してくれた。近年は中国でも日本でも、互いの国で作られた歴史的な詩歌の研究を志す学生が少なくなっているのだという。専門にするのでなくても、詩作や朗読といった形で文化交流ができればよいと思う。文化的な素養は、分野こそ異なれ研究の糧となることだろう。

その他(自由記述)

私の家には金銭的余裕がないので、海外に留学しようなどとはこれまで考えたこともなかった。学費が免除されたり奨学金が支給される短期の派遣プログラムもあると知ったことで、今回のようなプログラムに興味を持ち、オリエンテーションに出席したことで参加への決意が固まったのである。とはいえ奨学金が支給されるかどうかは一大関心事であり、支給されないのであれば参加を取りやめようとも考えていたが、良きか悪きか今年度は参加者が少なく、私を含め全員が奨学金を受け取ることができた。大変リーズナブルな費用で、結果的にはそれに見合わぬくらい充実したプログラムに参加できたのは、この上もない好機であったと思う。私と同じ理由から海外留学や派遣をためらっている者がいたら、このような支援があることを是非とも教えたい。今回JASSO奨学金には本当にお世話になった。

○学生署名欄:

※ 本報告書及び短期派遣状況調査票(短期派遣学生用)(様式H-3)は、在籍大学等が指定する期日までに必ず提出すること。

※ご記入いただいた情報は、日本学生支援機構または日本国政府が行う留学生支援のために必要な業務に利用されます。また、行政機関及び公益法人等から奨学金の重複受給の防止等のために照会があった場合は、適正な範囲内においてこの情報が必要に応じて提供されます。